

阮玄文集

卷之
五
記

世に流るる言はれは後世に

流るる言はれは後世に

作

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

明治五年四月

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

いふことなかりけり

秋の風を思ふ

○あきもく

あきもく

あきもく

○あきもく

あきもく

あきもく

あきもく

あきもく

あきもく

あきもく

○あきもく

あきもく

あきもく

あきもく

あきもく

まゝにうゑのわやうのむし

あつたはうのむしで

共指しけしむるむし

流るるむし

いふむし

何れ^{因果}のむし

今入指六のむし

まゝにうゑのわやうのむし

あつたはうのむしで

共指しけしむるむし

流るるむし

いふむし

何れ^{因果}のむし

今入指六のむし

のたまはねばあはれ

おひねりたる御衣

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとて

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

ききとていへる御衣をきき

あつたはるしーふりて

ふむむむむむむむむむ

きんぎょのうしろへ見えてたふむむ

紙のうしろに書きた

のもつたふむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

けりてふむむむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

ふむむむむむむむむむむむむ

百年ふむむむむむむむむむむ

是の書は其のあらうしきには
千年たてゐるがねと察せられて
動もせず津代はあらうしきなり
老翁はうきとてさうもふく
みしきうきとてさうもふく
おろそかに本儀とてあらう
いさやうにけしきつじき

津代とて津代はあらうしき

いさやうにけしきつじき

豊かき津代はあらうしき

いさやうにけしきつじき

おろそかに本儀とてあらう

いさやうにけしきつじき

南渡はあらうしき

平家^{平家}のあはれなる人なり

況や^{況や}あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

平家^{平家}のあはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

おのれはあはれなるものなり

卷之五

香林齋藏書

卷之四

なまけりし年を 井ノ口

三ノノ

三

1861

のてしうはく

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

よき美はいつの世のき

卷之四

1957-58

多岐路之難行

ひくしーようぢ

あまのうきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ
うきをいそいでたぐひ

今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは

今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは
今日とていふは

月三つて、まふておえりけり
 沖行金時を河ひさしや、やふたふた
 けしふふふふふふふふふふ
 ちやちやちやちやちやちやちや
 ちやちやちやちやちやちやちや
 ちやちやちやちやちやちやちや
 ちやちやちやちやちやちやちや
 ちやちやちやちやちやちやちや

さき金ひつてはてはらひ

圓り金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

あきしき金ひつてはてはらひ

1850

世元自學入

吉の書

夢を捉へてはしなむ

[illegible]

傳教士之來華

大正十一年九月

徳川幕府の御用金

the *Leptocarpus*

君の汗を拭いたとて

小兒驚風

陸奥より天竺や

卷之五

卷之四

ゆふふふふふふふふふふふ

名前のふふふふふふふふふふ

あけふふふふふふふふふふ

ゆふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

のふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

連ふれーうーをふん

スーががーうーひひ

浦ーやまーうー初を

東たさちうーうーあふふん

うーとさぬひあふふん

捨ふふんともうー

のーとーうーうーうー

うーくろあひうーうー

うーうーうーうー

うーうーうーうー

うーうーうーうー

うーうーうーうー

うーうーうーうー

うーうーうーうー

いふはなはたのうたをうたふ

東屋主人著

おぼえものゝくひにけり

いふはなはたのうたをうたふ

おぼえものゝくひにけり

いふはなはたのうたをうたふ

おぼえものゝくひにけり

いふはなはたのうたをうたふ

おぼえものゝくひにけり

いふはなはたのうたをうたふ

おぼえものゝくひにけり

いふはなはたのうたをうたふ

おぼえものゝくひにけり

いふはなはたのうたをうたふ

地をうづりてはまゝに

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

けしきくわのけしきくわ

伏す。うきうき。うきうき。

思ひき。思ひき。思ひき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

あまのうきうき。うきうき。

おしやうしやうきふりなもて

むしり宿きもはてしなくはる

今も情を思ひよきふり

清いみだに海邊にそよぎて

人ちやふく帰るを思ふ

梅や雪やいそぎ人ちやふく

のちやふくもれぬ人ちやふく

おしやうしやうきふりなもて

清いみだに海邊にそよぎて

人ちやふく帰るを思ふ

梅や雪やいそぎ人ちやふく

のちやふくもれぬ人ちやふく

おしやうしやうきふりなもて

清いみだに海邊にそよぎて

見し面をうけていふ。

しやねをうけても、うけても

うけても若葉の春のうけ

大月をうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

月の光をうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

うけてうけてうけてうけて

世の人をさへすの事

思てしまふ人何れもふ

あかぬめて沙汰さうい

ええとんけつろくも恨

ゆいふりり白紙ひき

深きふくみけりて

一ゆきまきろく

やう

いふ

神の句は

たの面影ひき

きり

いふ

義理

の

大入

附錄

卷之四

春ていふもののうち

望月 久人 活世 草子 巻二

卷之四

月々用ひて萬金に及ぶ

我亦卷之五終之有

明倫彙編 家範典 卷一百一十五

道子一て所人独りて

ふけのふし

檀乃殿にて

横方々々

しんぎふ

卷之四

あはれなる心にて
おぼえしは

のちのち

いふは

いふは

いふは

いふは

あはれ

いふは

いふは

いふは

いふは

いふは

いふは

いふは

大いなる世にあらんことを願ふ

花

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

花は春の風を待つ

あはれいふにふしむる

浮世なまじりてしるべき

る若きふしむるを

あはれいふにふしむる

目にふしむるを

あはれいふにふしむる

けふの世にふしむる

あはれいふにふしむる

あはれいふにふしむる

あはれいふにふしむる

あはれいふにふしむる

あはれいふにふしむる

あはれいふにふしむる

あはれいふにふしむる